

第14回異業種ディスカッション大会

実施報告

熱闘激論！！自ら考え、行動する社会を目指して

～関西から考える3.11後の社会や地域の再設計。被災地復興を通して見えてきたもの～

2012. 8. 18 (土)

■初日プログラム:

1. 冒頭挨拶 (Crossover21スタッフ: 佐藤正弘)
2. 開催地歓迎ウェルカム挨拶 (尼崎市 稲村市長)
3. パネルディスカッション

〔登壇者〕

- ・久保田崇 陸前高田市副市長
- ・齊藤成人 (株)日本政策投資銀行関西支店企画調査課長
- ・田中宗介 復興庁主査
- ・稲村和美 尼崎市長

4. 全員参加ディスカッション (90分程度、10グループ)

〔議題〕

- ・パネルディスカッション登壇者への質問
- ・今回の震災の経験や、被災地復興・支援を通して、今後、日本の社会として何を学び取って、何を変えていかないといけないのか?

5. 発表・共有 (30分程度)

終了後、別会場 (17:30～「収穫祭ココエあまがさき店」) にて懇親会を実施

※参加者: 111名 (うち、懇親会参加者: 83名)

■2日目プログラム (エクスカージョン) 「阪神淡路大震災の復興の道のりを巡る」

◆日時 2012年8月19日 (日) 10:00～15:00

10:00 JR灘駅集合

10:30 阪神・淡路大震災人と防災未来センター 見学

(神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2) <http://www.dri.ne.jp/>

12:00 体験学習プログラム「震災語り部」を聞く・質疑応答

13:30 新長田 KOBETETSUJIN 28号見学 <http://www.kobe-tetsujin.com/>

昼食 (「新長田ぼっかけ粉もんシリーズ」)

地域の拠点交番所「水笠交番」を見学

15:00 解散

全体総括

報告者：田中 宗介

第14回ディスカッション大会は、初めての関西開催でしたが、見慣れた顔、初参加で緊張した顔、多くの方にご参加頂きました。定員超過の111名にお越し頂き、懇親会にも83名が参加されました。

これまで様々な業種、年齢、国籍の方々を巻き込んで議論してきましたが、今回は今まで以上に初参加という方が多く、新鮮な気付きと、いつも以上にリアクション溢れるアツい大会になったと思います。

最後まで積極的に参加して頂き、ありがとうございました！！

東日本大震災から1年余り、地域と絆、原発とエネルギー、政治と社会・・・、今般の震災は、多くの社会的課題が浮き彫りとなり、多くの大切な”何か”に気付くきっかけとなりました。そこで、今回のディスカッション大会は、個人として、組織として、様々な取組がみられる中で、被災地復興に限ることなく、社会や地域のあり方を今一度議論することにしました。地域社会の制度や秩序を形作るのは行政だけでなく、我々自身であることということ、自分たちが責任を持って行動すること、義務を果たすということ、そして、一人で考えるのではなく、各人の”想い”をぶつけ合い、新たな気付きと発想を以て、次へ進むこと。このような今回のディスカッションの狙いを冒頭のパネルディスカッションで参加者に訴えかけ、後半のグループディスカッションで、参加者間で共有しました。各グループでの議論の内容は、各ファシリテーターの報告に委ねますが、是非、他のグループの議論も振り返り、”気付き”を倍増させてください。

また、今回新たな取組として、USTREAMでの生中継を行い、残念ながら会場まで足を運べなかった方々や遠方の会員にも想いを共有しました。また、ディスカッション翌日には、エクスカーションを実施し、17年前の震災の被災地神戸を地元スタッフの案内で回りました。

Crossover21は、今後も幅広いステークホルダーとの交流と、生の感動を大切に、新たな気付きの場を提供すべく、進化を続けます。

■ USTREAM

ウェルカムスピーチ、パネルディスカッション part1

<http://www.ustream.tv/recorded/24786821>

パネルディスカッション part2

<http://www.ustream.tv/recorded/24787685>

■ 尼崎市HP（市長の活動日記「8月18日」でも取り上げて頂きました）

http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/welcome_mayor/004katudounikki/004photo201208.htm

ウェルカムスピーチ

■稲村和美 尼崎市長

「Crossover21の関西初上陸の場所が尼崎になって大変光栄です。少子化や高齢化の進行する成熟社会への対応が求められており、こうした新たな社会への対応には、Crossover21のように様々なバックグラウンドを持つ人たちがお互いの意見を交換し、強みを出し合える異業種交流のような場が重要な役割を果たすと思います。」

(市長には、全体ディスカッション及び懇親会までご参加頂きました。)

パネルディスカッション

■司会進行：佐藤正弘（京都大学准教授）

■登壇者：

- ・久保田崇 陸前高田市副市長
- ・齊藤成人 (株)日本政策投資銀行関西支店企画調査課長
- ・田中宗介 復興庁主査
- ・稲村和美 尼崎市長

齋藤課長から、阪神淡路大震災と東日本大震災の被害や経済情勢の比較、阪神淡路大震災前後の兵庫県の経済的状況などを紹介。

田中から、東日本大震災に対する政府の対応状況、被災地の復興状況等を紹介。

久保田副市長から、陸前高田市の被害及び復興の状況を紹介。

稲村市長から、阪神淡路大震災でのボランティア経験を通じた現行制度の限界や社会変化へのアプローチなど、市民目線での社会や行政への関わり方について経験を交えて紹介。

各登壇者は、有識者としてではなく、社会の課題に対して行動するパイオニアとして、新たなことへのチャレンジの大切さ、経験を通じて学んだことなどを披露し、社会を構成する一人一人が、社会や地域のあり方を考える重要性などを参加者と共有しました。

ディスカッション報告

報告者：植木武志（Cグループ）

グループでの議論では、Crossover21らしく、様々な意見が飛び交いました。その意見を強引に三つの要素に纏めてみました。

一つは、「住民と一緒に復興を進めていく」という話。すなわち、「行政が被災者(住民)のニーズを聞いてそれを実現していく」という両者を分けた考えではなく、互いに当事者として復興を進めていくという考えです。

二つは、東日本大震災を起点とした新たな復興のあり方を探るという話。

パネラーのお話の中に、震災後の地域の過疎化、経済の弱体化という事例がありました。これについて、遅かれ早かれ顕在化したであろう問題が、震災をきっかけとして前倒し且つより鮮明な形で現れたのではないかと言う指摘です。

だからこそ、その復興の進め方は震災で被害を受けていない地域であっても十二分に参考になるものであるし、また参考にするべきという話ができました。

三つは、ビジネスの力についての話。

復興支援の一つで、「東北のものを買う」という行動は、生産者にとって経済的な支援になるのみならず、精神的な支援にもなるという指摘がある参加者の方からありました。自分の提供したモノやサービスが売れる、ということは自分が必要とされていることを認識できるので心理的にも支えになる、ということです。

これを受けて、従来「国(行政)」「住民」「NPO」という要素で語られがちだった復興に、「企業」というファクターを加えることで、復興活動をより有効なものにしていくことができるのではないかと、という議論が飛び交いました。

短い時間ではありましたが、他にも様々な意見が出てきて、私自身気付きを得ることができました。3.11の時、国内にいなかったので、どうしても現実感が弱かったのですが、この議論を通じ、震災を自らのこととして捉えなおすきっかけをつかめたように思います。

以上

ディスカッション報告

報告者：田中健一（Dグループ）

1. 所感

Dグループは私の他に10名で、官庁関係3名、メディア1名、大学関係3名、環境を扱っている団体3名でした。1名は四国よりの参加、他は関西在住でした。年齢も20代から60代まで多岐にわたったこともあり、世代を超えて白熱した議論が繰り広げられました。議論は3.11後の復興において、国への注文、国に要望するだけでなく地方政府も自立すべき、市民団体の活躍の場を広げるべき、などそれぞれの経験をもとに意見がだされました。

2. 内容

最も多く議論した内容は今後の社会のあり方として、環境を重視していくこと、教育を活性化していくことです。

一方、環境とは経済的にゆとりがある市民ができるものではないかとか（日々の生活でいっぱいの人には環境までかまってもらえない）、（消防による防災教育を例に）子供への教育は進学に役立つのか？、保護者は進路に直結するものを求めるのではないか？などの意見もでました。解答を引き出すというより各人の行っていることを理解し、自分のしていることと関係づけていくことを主眼におきました。

3. 議論を終えて

関西ではじめて開催されたCrossover21でした。Dグループの議論に参加した方はどなたも熱い想いのもった方であり、自分の仕事をこえてすべきことを探している人らでした。今後もミニオフ会のような形で継続できればと思います。

以上

ディスカッション報告

報告者: 田中 宗介 (Fグループ)

1. 所感

Fグループは大学院生、大学教授、地方公務員、国家公務員、民間企業（金融、エネルギー）など、多様なキャリアを持ったメンバーが集まり、議論ができた。

今回のディスカッション大会に参加するきっかけも様々で、それぞれの経験に基づく活発な意見交換を行った。

2. 内容

被災地復興や地域振興のために何ができるか？を中心に議論した。

被災地復興に関しては、義援金頼みの制度は既に破綻しており、行政頼みでも無い仕組みが必要ではないか。その際、長期的に関わることが必要だという意見に皆が共感した。長期的な地域への関わり方として、まずはその地を訪れることが必要であるが、何が人を向かわせるかと言うと、義務感ではなく、逢いたくなる「人」ではないか、という意見に集約された。最初は、イベントなどのきっかけが重要であるが、その後、何度も訪れ、交流が持てるようになるには、「人」の力が大きいという議論になった。

また、地域の消費活動の活性化が地域を元気にするという側面から、資力のある人は資金を出し、行き来できる人は交流を続け、そうすることで、その地のサービス活動が活性化するという議論になった。その際、節約の仕方は分かっているが、お金の有効な使い方を知っている人は少ないのではないか、将来の生活に不安があるから支出が少ないのではないか、といった意見が出された。

3. 議論を終えて

人と人のつながりや交流が、地域の元気、地域の雰囲気を作ることを改めて共有した。当たり前なことではあるが、席に着いているグループのメンバー自身が、日本各地から集まった初対面の人同士の中で議論するという「つながり・交流」を体験し、新鮮な経験を楽しめたように思う。

ディスカッション報告

報告者:大野 吉紀 (Hグループ)

1. 所感

Hグループの年齢構成は20代・30代が中心であったが、その職業は公務員が約半数、残りは民間企業や大学関連であった。所感としては、全体的に建設的な意見交換が交わされ、グループ全員がまんべんなく意見を言えたのではないかと感じている。

2. 内容

Hグループでは、「我々は3.11の経験を生かして今後何が出来るのか」というテーマを設定し議論を重ねた。そこでまず挙げた意見として、FacebookやTwitterを利用して、例えば被災地、人命救助、あるいは救援物資など情報共有を図り、お金のかからない、そして場所も問わない長所を最大限に生かした活動を念頭に日頃から「ネットワーク」を構築していくことが重要だという意見があった。それに対して、東京・名古屋・大阪の首都圏を中心とした三連動地震のような大規模災害によってインターネットの使用が日本中で困難になった、あるいはFacebookやTwitterなどが利用できないお年寄りや子どもや障害者など社会的弱者と呼ばれる集団に対するケアはどうするのかという意見もあった。そのひとつとして挙げられた対策は、日頃からの地域・近所とのつながり・ふれあいが何より大切で、昔ながらの「火の用心」や「声掛け運動」が有効ではないかとの意見もあった。

3. 議論を終えて

3.11を経験した我々は、最近メディアを通じて「つながり」という言葉を耳にするが、一人ひとりがその言葉の意味や大切さを改めて時間をかけて考えていかねばならないと感じた。

エクスカージョン報告

「関西×Crossover21」のExcursion企画として、「阪神淡路大震災の復興の道のりを巡る」を実施いたしました。被災地が培って来た震災の経験と教訓を「被災地からの復興へのメッセージ」として、実際に現地を参加者総数（8名）で歩き巡ってきました。

最初は、「阪神・淡路大震災人と防災未来センター」を訪問。

阪神・淡路大震災の経験を語り継ぎ、その教訓を未来に生かすことを通じて、地域防災力の向上や安全・安心な市民協働・減災社会の実現を感じ、学べる施設を見学しました。施設見学後は、Crossover21のために、「震災経験者による語り部企画」を行っていただきました。

当日は、野村勝さん（元・神戸市消防士）にご講話いただきました。地震時における神戸市の消防現場の実体験から震災後発足した「細田・神楽まちづくり協議会」（神戸市長田区）の経験をお話いただきました。

「震災後の地域復興は、住民たちの手で作り上げる！」

これを一心に、区画整理事業や地域の防災治安対策に尽力され、その成果として公園整備や「水笠交番」の設置など地域の声を汲み取りながら、強いリーダーシップを発揮された経験談をお伺いできました。

今は、自らの経験に基づき、東日本大震災の被災地や東京、京都に出向き、「地域で作り上げる復興、防災、まちづくりの必要性」と「安心と安全の街の大切さ」を語り継いでおられます。また、消防士の経験を活かし、身近な安全対策などもお教えいただき、予定時間を超えて、多くの質問にも丁寧にお答えいただきました。

その後、野村さんの講話にもあった「新長田」の街へ

神戸市生まれの漫画家・横山光輝氏の代表作として知られている「鉄人28号」。

長田区の公園内に高さ15.6m（全長18m）の実物大モニュメント像がそびえ立っています。2009年に完成し、恒久設置されています。各自、思い思いに鉄人モニュメント像を前に写真撮影を行いました。お腹もすいたところで、長田の地へ来たのであれば、「ぼっかけ」（※牛スジ肉とコンニャクを煮込んだ料理の事。長田区周辺では甘辛く味付けして煮込んだものをぼっかけと称しています。各種料理にトッピングされます）を食べないわけにはいきません。関西と言えば、「粉もん」ということで、「ぼっかけ」入りのお好み焼きほかを食してきました。

その後、野村さんの講話にあった地元住民による念願で勝ち取った、地域治安のシンボル「水笠交番」を見学し、それぞれの帰路につきました。

阪神淡路大震災から17年・・・記憶をつなぎ、東日本大震災復興にどのように活かしていくか、前日のディスカッションでの内容を再考する機会となりました。